

国土交通省は“真実を隠していた”。裁かれる隠蔽体質。

ハッ場ダム運動の「理論の支柱」である嶋津暉之さんが、国土交通省への情報公開請求で驚くべき内部資料を入手しました。内容は下記の2点ですが、いずれも国土交通省が多額の税金を注いで手にしたものです。真実は国土交通省にとっては“不都合な真実”でしかない。この悪質な隠蔽体質がハッ場ダム問題の核心です。

カスリーン台風が再来しても最大洪水量は16,500? /秒しか流れない。

基本高水22,000? /秒との差は説明できず。

国土交通省は、1947年のカスリーン台風による洪水は、観測基準点である八斗島で推測17,000? とし、さらに推測で上流の氾濫分5,000? を加えると22,000? 流れたとしています。この数字は利根川水系整備基本方針の基本高水(200年に1度の洪水)22,000? となり、現在策定中の利根川水系整備計画の枠決めとなって、ハッ場ダムなどすべての治水事業の根拠になっています。

ところが、コンピュータで現在の治水環境(既設の6ダム、嵩上げた堤防、掘削した河床など)にカスリーン台風のデータ(降雨分布、降水量、降雨時間など)を重ね合わせたところ、八斗島の最大洪水流量は16,500? であることが分かりました。

22,000? との差は、1,750? は既設の6ダムによるものと答えましたが、残る3,750? は外注先の調査会社にある(本当ならこれも問題)。などと言を左右して答えられませんでした。

ハッ場ダムの計画流量3,900? /秒。実測は1/3以下。「ダムは不用の証明」

ハッ場ダムの洪水調節容量は、ダム予定地上流に3日間降雨量354mmが降り、最大洪水量3,900? がダムに流入し、2,400? をカット、1,500? を放流する、としています。

2001年9月、計画雨量に相当する340mm以上の雨が実際に降りました。ところが、ハッ場ダム予定地のすぐ下流の岩島観測点での洪水流量は、最大で1,247? 。ハッ場ダム予定地の流域面積は708k m²、下流の岩島地点は747 m²ですから、3,900? 以上流れて当然ですが、実際は1/3以下。ダムがなくても、洪水時の放流量1,500? を下回る1,247? しか流れないと言う事は、ハッ場ダムはまったく不用であることを、国土交通省のデータが証明したわけです。

これには二つのことが考えられます。

- 一、国交省は認めていませんが、吾妻渓谷の狭く曲がりくねった地形が天然のダム効果を発揮した。現に、当日は渓谷上流沿いの国道が冠水しました。
- 二、これも国交省は認めていませんが、森林の保水力によって雨水の吾妻川への流入が抑制された。なお、このことは の16,500? もさらに小さくなることが考えられます。

第11回ハッ場ダム裁判は、4月24日(火)午前11時30分

統一弁護士団長・高橋利明弁護士が「ダムサイト岩盤の危険性」を陳述します。

高橋弁護士はTVドラマ「岸边のアلبム」のテーマとなった多摩川水害で勝訴。河川、地質では専門家はだしの知識の持ち主です。ハッ場ダム予定地には地質学者と幾たびも足を運び、ご自身の目と足で調べました。当日は写真と映像化した資料を駆使して傍聴者にも判りやすく陳述します。

利根川水系河川整備計画シンポジウム(仮称)

日時:5月20日(日)午後1時~5時 場所:「水道会館」(JR水道橋駅御茶ノ水より出口左前) 淀川水系流域委員会で河川行政を住民に開いた元近畿地方整備局河川部長・宮元博司氏など、多士済々のパネラーが参集します。是非ご参加ください。

本年度会費(一口1000円)未納の方は同封の振込用紙でお願いいたします。

ハッ場ダムをストップさせる茨城の会事務局 tel/fax: 取手 0297-72-7506 長野原 0279-84-7010